

シンボル展 近世甲州 医人伝

2016年7月16日(土)→9月5日(日)

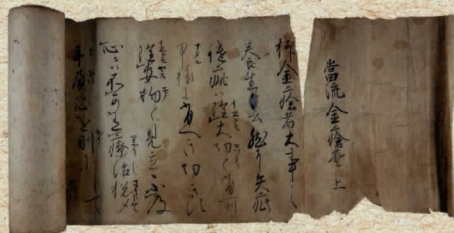
蘭学がさかんになり、漢方との折衷による新たな医療技術の開発が進んだ18世紀後半、甲斐国にも、人々の命を救うため、自らの持てる力を尽くした医者たちがありました。戦国時代以来、甲斐国に根付いていた伝統医術は、やがてオランダ語学習に基礎づけられた先進知識と融合し、より幅広い人々の命を救う力になりました。また、医者たちは諸国を遊学し、さらに自らの得た知識や技術を後進に伝え、全国レベルで交友を深めていきました。特に種痘の普及にあたっては、この医者たちの絆が大いに力を発揮し、多くの人々を天然痘の恐怖から救ったのです。

本展では、甲斐国で活躍した医者たちをご紹介します。

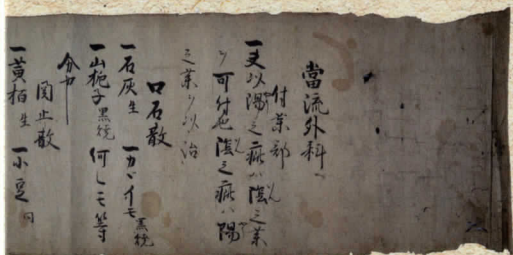
プロローグ

座光寺南屏 (1735-1818)

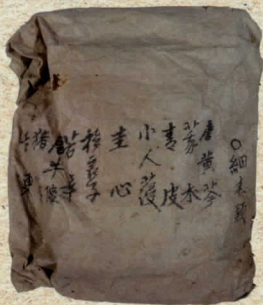
市川大門村(現市川三郷町)の医者。座光寺家は初代玄格が徳川綱豊(1662-1712)に仕えて以来の医家であり、南屏は京都の香川南洋(1714-77)に医術を、藤田村(現南アルプス市)の五味釜川(1718-54)に儒学を学んだ。市川大門周辺の医家の子弟を多数教育し、医者として育てあげている。儒学者としても『正名録』など多数の著作があり、また書家としても非常に著名であった。医学と儒学が一体であった当時であって、一流の学者であったといえる。



1. 「当流金瘡」上・中・下 (高室家資料)



2. 「当流外科 付薬部」(高室家資料)



3. 生薬 (個人蔵)



5. 座光寺南屏肖像 (甲州文庫)



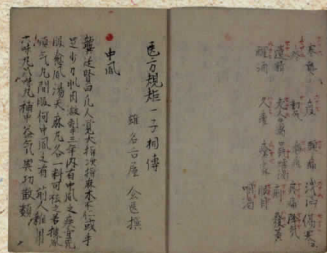
6. 『医事或問』 (甲州文庫)



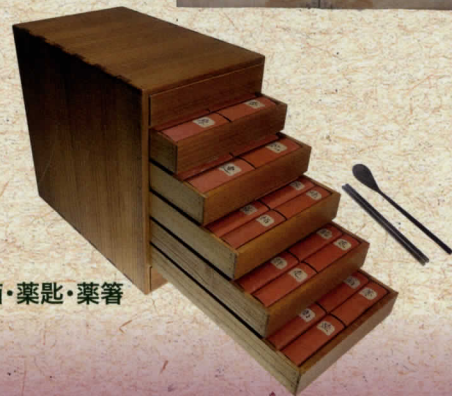
7. 「解体図」 (個人蔵)



4. 「家伝温脾散」袋 (個人蔵)



8. 「医方規矩」・同「目録」(個人蔵)



9. 薬箱・薬匙・薬箸 (個人蔵)

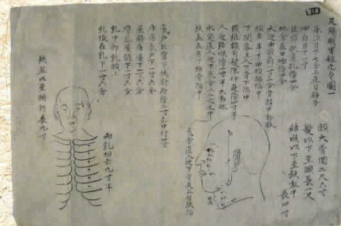
第一章

石坂宗哲 (1770-1842)

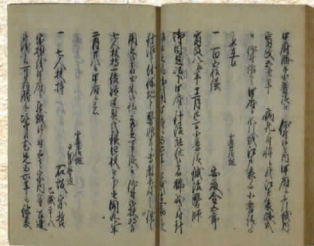
江戸の鍼医。幕府の医官を務め、寛政9年(1797)には幕命により甲府に医学所を設け、医者いしの養成に尽力した。また奥医師として將軍徳川家斉(1773-1841)の侍医になっている。さらに、オランダ商館長の江戸参府に随行したシーボルト(1796-1866)に自身の著書と治療用の鍼一式を贈り、その技術はヨーロッパにまで伝えられた。蘭方にはやや否定的な立場であったが、漢方との折衷的な医学を追求し、多数の医学書や解剖書を残した。



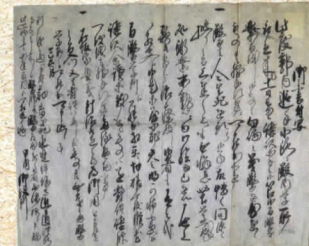
10. 『鍼灸説約』(甲州文庫)



11. 「人体各部 穴之図」(高室家資料)



12. 「甲府御城付 卷六」(甲州文庫)



13. 「医学所設置につき御書付写」(赤岡重樹旧蔵資料)

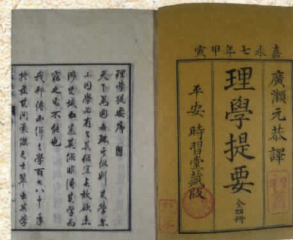
第二章

大久保黄齋 (1812-95)

古市場村(現南アルプス市)の医者初代大久保章言(1770-1835)の次男。兄の貞固も章言の名を継いで医者となっている。江戸の蘭学者坪井信道(1795-1848)のもとで蘭学を学んだのち、甲府で開業したが、兄の死をきっかけに古市場に戻り、84歳で亡くなるまで医業を続けた。村松岳佑に「峡中の医者で、オランダ語を理解できるのは、独り大久保黄齋のみである」と称えられた秀才である。蘭方医・種痘医として活躍するほか、篆刻や詩文も得意とした。



14. 廣瀬元恭肖像(甲州文庫)



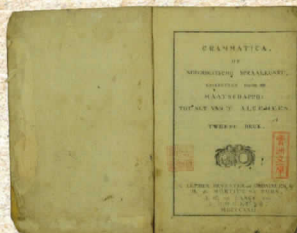
15. 『理学提要』(廣瀬家資料)



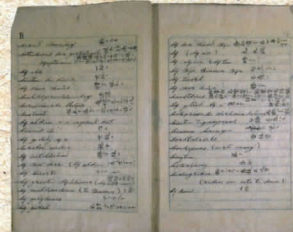
16. オランダ語文法書写本(大久保黄齋自筆)

廣瀬元恭 (1821-70)

藤田村(現南アルプス市)の廣瀬家は元恭の祖父周平(中庵、1732-1809)以来、医者を生業とする家であった。元恭は緒方洪庵(1810-63)らとともに坪井信道の弟子として修行を積み、弘化元年(1844)には京都に私塾時習堂を開いて、多くの門人を集めた。その門人名簿には、陸奥宗光・佐野常民・田中久重なども名を連ねている。医学のみならず理学、兵学など多数の著書・訳書を著しており、その博識さには驚かされる。また嘉永3年(1850)には京都から藤田村の兄和達に牛痘癩を送り、甲斐における種痘の普及にも務めた。



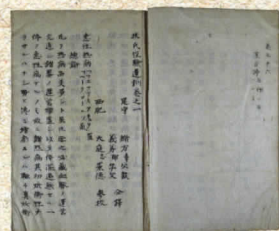
17. 『和蘭文典前編』(村松岳佑手沢本)



18. 「蘭文医学字典」(村松家資料)



19. 「蘭語法」(村松家資料)



20. 「扶氏経験遺訓」写本(村松家資料)



21. 村松岳佑肖像写真(村松家資料)

第二章

橋本伯寿 (?-1822?)

市川大門村(現市川三郷町)の医家に生まれる。長崎へ遊学し、吉雄耕牛(1724-1800)、志筑忠雄(1760-1806)といった当代一流の蘭学者に学んだのち、郷里に戻り開業した。当時、疱瘡や麻疹などの流行病は人が生まれ持った胎毒に由来するという見解が主流であった。伯寿は文化7年(1810)に『断毒論』を著してこれを真っ向から否定し、人から人へ毒気が伝染することで病気が発生すると主張して、感染を予防するためには隔離することが必要であると説いた。このことで幕府医学所の池田瑞仙(1734-1816)と対立することになる。



26. 「唇舌病変図」(飯田文良氏旧蔵資料)



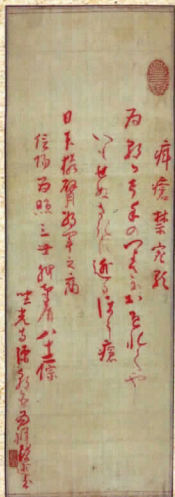
27. モーニッケ肖像 (村松家資料)

村松岳佑 (1822-68)

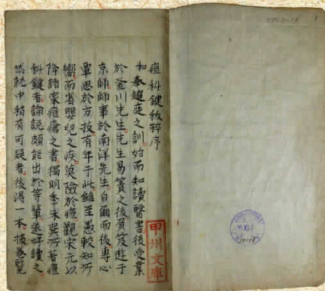
五開村(現富士川町)の名主の家に生まれ、市川大門村の医家村松家の養子となった。医術を古市場村の大久保章言に学び、のち長崎に出てオランダ商館医モーニッケ(1814-87)の弟子となった。モーニッケは嘉永2年(1849)に日本に種痘を伝えた人物として有名である。その弟子である岳佑も種痘の普及に尽力し、嘉永3年には牛痘痂を長崎から甲斐の内藤泰順・大久保黄齋らに送り、甲斐での種痘実施に成功している。嘉永5年には自らも甲斐に戻って、市川大門を拠点に各地へ赴き種痘を実施した。



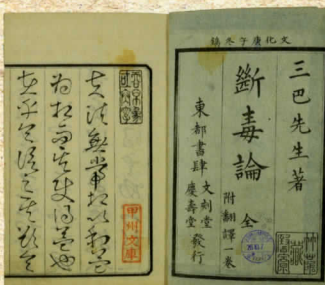
28. 村松岳佑種痘道具 (村松家資料)



22. 疱瘡禁宛歌 (甲州文庫)



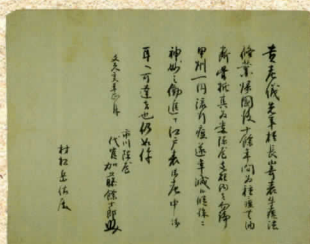
23. 「痘科鍵抜粋」(甲州文庫)



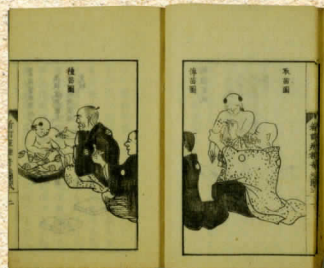
24. 『断毒論』天・地 (甲州文庫)



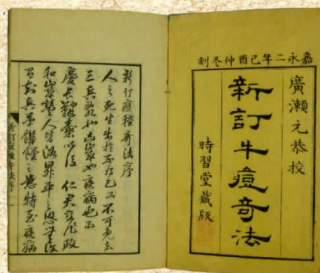
25. 「秘伝唇舌常候図」 (個人蔵)



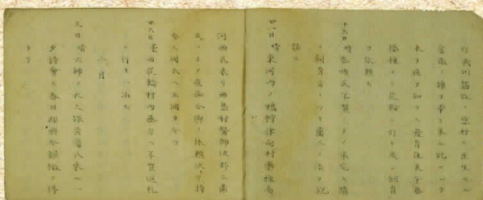
30. 種痘骨折神妙につき達書 (村松家資料)



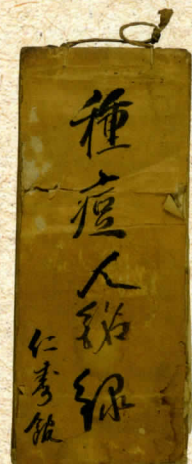
31. 『新訂牛痘奇法』(廣瀬家資料)



32. 緒方洪庵書状 (廣瀬家資料)



29. 「重要日記」(村松家資料)

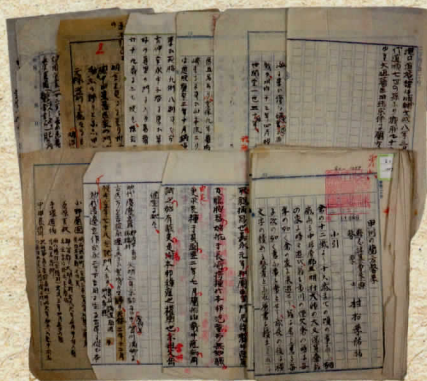


33. 「種痘人銘録」(廣瀬家資料)

エピローグ

村松学佑 (1869-1925)

村松岳佑の孫で、市川大門村出身。本名は^{くわ ぞう}鋏三。明治29年(1896)に帝国大学医科大学を卒業し、島根県立松江病院副院長、山梨県病院(山梨県立中央病院の前身)の副院長および院長を歴任し、明治34年に結成された山梨県聯合医会(山梨県医師会の前身)では初代会長を務めている。このように医者として輝かしい経歴を持ちつつ医学史研究にも情熱を傾け、独力で『甲斐国医史』の編纂を行った。さらに大正5年(1916)には山梨県志編纂参与となって医学史関連資料の収集と調査研究につとめた。



34. 村松学佑自筆原稿
(村松家資料・竜王村古文書)

甲斐への種痘伝来 — 廣瀬元恭と村松岳佑 —

天然痘ワクチンとして牛痘を用いた種痘法は、1796年にイギリスのジェンナー(Edward Jenner, 1749-1823)によって開発され、日本にも早くからその情報はもたらされていた。19世紀前半、何度か日本への種痘導入がはかられたが、いずれも成功しなかった。そのようななか、オランダ商館医モーニッケ(Otto Gottlieb Johann Mohrike, 1814-87)は佐賀藩主鍋島直正(閑叟, 1814-71)の要請に応じ、嘉永2年(1849)に初めて日本へ牛痘痂を招来することに成功し、こののち種痘は急速に日本全国へ広まっていった。

村松学佑の『甲斐国医史』をはじめ、これまでの甲斐の医学史のなかでは、甲斐に種痘が伝わったのは嘉永3年の冬、廣瀬元恭と村松岳佑が異なるルートでほぼ同時に導入したとされてきた。しかし、元恭の兄和達(ちか さと)の日記(廣瀬家資料)に、嘉永3年8月27日、「元恭方牛痘之行申」す旨の書状が来た、という記述がある。こののち藤田村の和達のもとで継続的に種痘が行われた様子はないが、すでにこの段階で(ともすればもう少し前の時点から)、元恭によって甲斐への種痘導入が図られていた可能性が高い。

だが、甲斐にあって種痘の普及を強力に推し進めたのは、村松岳佑であった。両者の直接の交流を示す資料は確認できていないが、ともに「一刻も早く種痘を普及させ、天然痘の恐怖から人々を救いたい」という思いを強く抱いていたことは、その行動から明らかである。



35. 「山梨県志医事衛生資料」
(續生文庫・若尾資料・竜王村古文書)

シンボル展 近世甲州 医人伝

本リーフレットはシンボル展「近世甲州医人伝」の展示内容について解説を加えたものである。本展の展示資料は、No. 3, 4, 7, 8, 9, 25を除き、全て山梨県立博物館の所蔵品である。本文の執筆・編集は中野賢治(山梨県立博物館)が担当した。

本展の開催にあたっては、新津直樹氏、村松定史氏に多大なご協力を賜った。末筆ながら記して感謝を申し上げる。

平成28年7月16日 発行

編集・発行 山梨県立博物館
〒406-0801
山梨県笛吹市御坂町成田1501-1
TEL 055-261-2631
<http://www.museum.pref.yamanashi.jp/>

印刷 UTY 企画